

博士学位論文審査要旨

2019年6月21日

論文題目： 武田泰淳中国小説研究
——中国語資料援用の試み——

学位申請者： 藤原 崇雅

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 田中 励儀

副査： 文学研究科 教授 西川 貴子

副査： 文学部 教授 瀬崎 圭二

要 旨：

本論は、武田泰淳の中国小説を取り上げ、中国語資料を援用して考察することで、泰淳文学の解釈を更新することをめざした論考である。

第一章「居留民による中国語評論」では、太平洋戦争敗戦後、引き揚げ前の上海において中国語で発表された評論「日本文学的命運」を翻訳紹介し、泰淳の日本文学に対する考えを明らかにした。新資料としての価値がある。

第二章「政治化された内臓」では、敗戦後上海の居留民を管理する保甲制度の中で暮らす日本人を描いた小説「非革命者」を取り上げ、そこに描かれた生の様態を分析した。当時の重慶派国民党による統治の実態を明らかにしたところは評価できる。

第三章「物語論としてのJ・P・サルトル」は、泰淳の出世作「風媒花」とサルトル「自由への道」との共通性を検討した研究である。泰淳は、描写の速度を物語内に流れる時間と等速にする“情景法”などをサルトルから学んだとする。中国小説との関わりは薄いのが、戦後の日本文学が世界文学と通じることを明かしたところにみるべきものがある。

第四章「精神分析学」批判としての小説」は、敗戦後の日本で流行した精神分析学を批判・諷刺する小説「恐怖と快感」の作品構造を論じた。泰淳が多様な話題を作品化できた背景に、中国小説を創作する中で体得した方法があるというが、より詳しい論証が必要だろう。

第五章「中国文人の〈隠退 Passivity〉」、第六章「古典解釈の弁証法」は、〈「紅樓夢」論争〉の当事者となった古典文学研究の大家俞平伯をめぐる、泰淳の随筆「渺茫たるユ氏」、小説「うつし絵」、および、村松暎の中国文学研究を考究し、泰淳の思想的位置を明らかにした。

第七章「十三妹にされた何玉鳳」は、『中国忍者伝 十三妹』をその典拠と比較しつつ、泰淳の創作意図を探った研究である。

博士論文の構成に不十分な点を残すが、真摯な姿勢で泰淳文学に取り組み、新資料を含む丁寧な調査に基づく論文の展開は評価できる。よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2019年6月21日

論文題目： 武田泰淳中国小説研究
——中国語資料援用の試み——

学位申請者： 藤原 崇雅

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 田中 励儀

副査： 文学研究科 教授 西川 貴子

副査： 文学部 教授 瀬崎 圭二

要 旨：

上記審査員3名は、2019年6月10日午後7時から約2時間30分にわたり、徳照館第二共同利用室において、公開で学位申請者に対して、口頭試問を行った。

学位申請者は、審査委員からの質疑に対して、提出論文についての専門的知識はもとより、関連する諸分野の問題についても、的確かつ詳細な応答を行った。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学力水準の高さが確認された。

また、外国語（中国語）についても、本論文の内容に関わる形で語学試験を行い、十分な学力のあることが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 武田泰淳中国小説研究
——中国語資料援用の試み——

氏名： 藤原 崇雅

要旨：

本稿は、武田泰淳（一九一〇～一九七六）の中国小説を対象に、中国語資料を援用して考察することで、その解釈を更新する試みである。

序章ではまず、先行研究で展開された議論の不十分な点を三点述べたうえで、それぞれを更新する方法を述べた。

第一点目は、中国語で書かれた資料が十分に参照されていない点である。泰淳の中国小説は、作家の上海体験を踏まえて書かれ、中国文学が典拠とされているにもかかわらず、これまで中国語資料が援用されることが少なかった。また、泰淳が中国語で書いたと推定される評論もあるが、そのような資料の内容が検討されることもなかった。中国語の資料を用いた作品分析を行うことで、既存の研究を更新できることを説明した。

第二点目は、中国の文化や文学の分析に基づいて書かれた批評理論が参照されていない点である。泰淳研究においても、ほかの近代文学研究と同様に、西洋発の理論が援用されてきた。しかし、泰淳の作品は中国を舞台とし、そこで生み出された文学を典拠としている。したがって、西洋発の理論よりも、中国に関連する対象を通じて書かれた理論を手がかりとした方が、妥当な解釈に至ることができるはずである。中国の文化や文学の分析に基づいて書かれた批評理論を参考にすることで、作品の有する歴史的背景に即した表現分析が可能になることを説明した。

第三点目は、泰淳文学のうち、戦後日本の社会的な話題をとり上げた小説と、中国小説とのあいだに、どのような関係があるのかが記述されていない点である。泰淳が作家として大成したのは、中国小説だけでなく、戦後日本の社会状況を題材とした作品を書けたからでもある。その創作が可能になったのは、中国小説を書くなかで、方法のある程度確立したからだと推測されるが、その方法についても論述する必要がある。中国小説以外の小説において、しばしばとり上げられる「精神分析学」をモチーフとした作品の検討を通じて、泰淳文学に特徴的な方法が析出できることを説明した。

第一章から第七章にかけては、泰淳の中国小説のうち、文学史的に評価の高いものや、中国文学受容の観点から注目に値するものを選び、序章で述べた先行論の問題点の更新を試みた。以下、各論の論旨を簡単に述べる。

第一章では、泰淳が上海から引揚げる間際に、その高い語学力で記したと推定される中国語評論「日本文学的命運」〔日本文学の命運〕を紹介した。上海現地民に向けて述べられる文学史であるこの評論からは、泰淳が本格的に小説創作にとり組む前に、どのような日本文学に親しんでいたのかを知ることができる。泰淳は中野重治の転向文学をはじめとした、政治主義からの挫折として書かれた私小説的な作品について、そのような挫折をせざるを得なかった政治状況が反映されているとする、逆説的な評価を行っている。このような評価は、その後、泰淳が執筆していくことになる作品の方法を予言したものとして読める。上海体験を私小説的な形式を通じて書く発想のおおもとに、独自の日本文学理解があったことを確認した。

第二章では、上海滞在時の立場が私小説の形式で書かれた短編、「非革命者」を論じた。「審判」や『蝮のすゑ』の発表を経てから、上海小説としては最も後期に発表された作品である。この作品において泰淳は、ただ単に上海で生活した自己を書いたのではなく、そこで自身をとり巻いていた状況を、

よく対象化して主人公の自意識の周囲に書き込んだ。「非革命者」を、イデオロギー的には親日的である一方で、実際には法規によってぎりぎり生きているだけの状態に留め置かれた上海居留民の生の様態を、諷刺的な作品構造を通じて記録した一編として解説した。

第三章では、泰淳の出世作である『風媒花』と、J・P・サルトル『自由への道』の共通性について検討した。『風媒花』の自作解説の中で『自由への道』への言及があるものの、その内実はこれまで詳細に論じられてこなかった。本稿では、邦訳全集が発行され広く読まれはじめたサルトル小説の時間の表象について『風媒花』との共通性が認められることを述べ、戦後日本という舞台が世界文学の方法を通じて提出されたことを論証した。具体的には『自由への道』のうち、情景法という描写の速度を物語内に流れる時間と等速にする手法と、登場人物の視点を頻繁に切り替える手法が、『風媒花』にも使用されていることを論証している。そのうえで、本作がサルトルによる通俗マルクス主義批判を踏まえつつ、中華人民共和国成立期を舞台とし、体制の異なる国家の建設が歴史の進歩的段階ではなく、連続的に流れる時間の一部として表現されていることを明らかにした。

第四章では、泰淳が中国を題材とすることから離れて、戦後日本の社会的な話題をもとに小説を書いていることを述べた。一九五〇年代、一通りの上海小説を発表し終えた泰淳は、精神病や「精神分析学」をモチーフとした作品を発表した。作品名を挙げれば、「幻聴」や「動物」、「恐怖と快感」などがある。多様な話題を無理なく作品化できた背景には、中国小説を創作する中で体得された方法があった。『風媒花』においては、情景法の代表的な文体として、会話の言説が採用されていたが、その書き方を基礎に、泰淳は中国小説以外の作品を創作していったのである。初刊の「あとがき」において、「精神分析学」を批判したことが明言される短編「恐怖と快感」の構造を分析した。

第五章では、再び中国作品である「渺茫たるユ氏」と「うつし絵」をとり上げ、中国文人である俞平伯の評論がいかにか受容されているのかを詳らかにした。泰淳は「渺茫たるユ氏」においては、俞平伯の雑文を皇帝権力への批判と位置づけていたが、「うつし絵」では一転して、文人がそのような批評的立場を消失したことが印象づけられる。もともと俞平伯は政治に関わっていないようであり、高度なレトリックを通じて批判を行う〈隠退 Passivity〉の文学者であったが、その態度は次第に、ただの隠居に過ぎないものへと変化したと、泰淳は捉えていたのである。そのうえで、一九五〇年代半ば、中国において発生し、古典文学研究の大家である俞平伯がマルクス主義批評の立場をとる青年らに批判された議論である『紅樓夢』論争に反応して、「うつし絵」が書かれていることを論述した。

第六章では、『紅樓夢』論争が日本において紹介された言説それ自体をとり上げ、同時期における日本の知識人の中国に対する態度を、より詳細に検討した。日本の知識人たちは、俞平伯を批判した青年らを支持し、対して新聞メディアは、苛烈な思想改造の一貫であるとして論争を報道した。しかし、村松暎という研究者は論争に対して特定の判断を下すのではなく、自らの白話小説理解を踏まえ、議論に参加していくような論文を発表した。この論文では、俞平伯もマルクス主義批評も、それぞれに批判が加えられつつ、自らの見解が公にされている。村松が、議論を判断によって収束させるのではなく、論争に存する弁証法の枠組を保持するような、独特の言説を提出していたことを証明した。なお、この章は泰淳作品の論ではないものの、同時期の中国文学者をとり上げることで、泰淳の意見を相対化するために設けた。

第七章では、『中国忍者伝 十三妹』を対象に、白話小説という中国清代に隆盛した文学を、泰淳がいかにか受容しているのかを明らかにした。『十三妹』のプロットは、主要な典拠である『児女英雄伝』を、ちょうど転倒したものとして理解できる。本作は、家庭の妻でありたい女性主人公が、その活躍を聴きつけた人々らによる期待の力学により、民衆を代表する存在として主体化される物語となっている。そのことを、典拠との比較から解明したうえで、主体化がヒロインにとって暴力として作用していることを、十三妹がたたえている寂しさに注目しつつ論じた。また、泰淳が初刊の「あとがき」で言及する中国現代文学『紅岩』をとり上げ、女性を共産黨員として主体化するにあたって、『紅岩』が反省のない作品であるのに対し、『十三妹』は女性の主体化が、たとえ積極的な価値を有したものであっても、彼女自身の声を篡奪してしまう可能性に意識的であることについて明らかにした。

以上の分析の結果を踏まえ、終章では泰淳の中国小説が〈国共対立期テキスト〉として読めることを述べた。清朝末期において政治体制が大きく変更され、中華民国が形成されたが、情勢は不安定となり、途中合作の時期があったとはいえ、二〇世紀の中国は国共内戦の季節だった。内戦は、狭義には一九四九年、国民党の台湾撤退によって集結した。しかし、政治的な緊張がそれによって完全に解消したわけではない。今日に至るまで、その問題は尾を引いている。したがって、日本の文学の中にも、そうした情勢の影響下に書かれているものがあるはずである。泰淳は、重慶派国民党が短期ではあるが統治した時期の上海に滞在し、また中国共産党が自国のアカデミズムを自由で理想的なものとして印象づけようとした論争や、共産主義を啓蒙する目的のもと発表された現代文学との関わりを通じて、自らの中国小説を書いていった。今日、戦後派の書いた文学として文学史上整理され、日本国内の文脈から読み解かれてきた作品のなかにも、見方によっては国共対立の文脈が色濃く表れているものがある。〈国共対立期テキスト〉の代表的なものとして、泰淳の中国小説を読めることを結論した。

論文の末尾では、精神病院が舞台となる長編『富士』関連の草稿類を翻刻、紹介した。この付録によって、第四章で展開した泰淳の精神病や「精神分析学」に対する興味を持ち方を、より詳細に確認することができる。